Vol.136 市史編纂だより

わがまち歴史散歩

池田における中世的権威の終焉

○「天正の兵乱」

戦国時代、池田の「市庭」（市場）は天文15年（1546）と永禄11年（1568）の2回にわたる戦で放火され、また、天正6年（1578）には荒木村重の織田信長への反逆に伴って伊居太神社などが焼き討ちされます。伊居太神社に残る『穴織宮拾要記本』には、天正6年の「兵乱」に遭った同神社神主などの体験が生々しく記録されています。

荒木方の軍勢がこの年10月28日「空曇りたる日暮れ方、伊丹より賀茂栄根村（川西市）栄根寺へ火を掛け」たのです。神主は驚いて、神社の「御神体を守り出し」、西の方の松の木の根に隠します。

▲伊居太神社

そこへ（軍勢が）「はや大勢来る」のです。家来と妻子36人、神社の記録を皮籠に二つ背負い、山越えに能勢大里（能勢町）へ逃げるのがやっとでした。

さて、その三日後様子を見に池田に帰ってくると、御神体は無事でしたが、御殿はすべて焼け、森も焼けてしまい、大里から米を少しずつ取り寄せ、焼け残りの木で仮小屋を建てる始末。住人の中には雨が降ると長櫃の横にかがんで避ける人もいました。

○寺院・神社の焼き払い

このとき荒木村重は、伊居太神社のみならず、摂津国一円の有力な寺社を残らず焼き払っています。池田市内やその周辺地域では、中山寺・清澄寺・満願寺・多田院・久安寺・勝尾寺・箕面（瀧安寺のことか）などがありました。『穴織宮拾要記本』は、「このときより当国の寺社領落る也」と記しています。

鎌倉時代以後、たとえば勝尾寺など有力な寺院に田畑を寄進し、自身や一族の後生安穏を頼む文書はたくさん残っています。当時、そうした寺院や神社は、強大な武家の力をもってしても簡単につぶすことはできませんでした。それだけ大きな権威と財政力を持っていました。天正6年荒木村重の一挙はそうした寺社の存立基盤を奪い去ったのです。

荒木村重は、池田氏や塩川氏・能勢氏・伊丹氏といった強大な土豪勢力とは違う、さらに強大な実力を持っていた事実を考えるべきでしょう。実際、『穴織宮拾要記本』には、荒木村重が天正2年（1574）伊丹に拠点を移したとき、池田の大広寺・本養寺の二か寺を伊丹に移転させたこと、また跡には小さな寺を建てておいて信者のうち「身元よろしき人」が死んだときには伊丹に和尚を呼びに行ったと書いています。

ちなみに、この記事は、戦国時代の池田に置かれた寺院が町の人びとの一生と深く結びついていたこと、また池田に有力な町民がたくさん住んでいたことを物語っていて、大いに興味を惹かれます。池田市地域における中世的権威は、荒木村重の一挙によって一斉に崩壊させられたと言っていいでしょう。荒木村重を歴史的に評価する一つの視点かもしれません。

○伊居太神社の復興

伊居太神社の権威もこのとき大きく損なわれました。かつて、神社の神事・祭礼には池田・伊丹の両城から神人が42人出て塚口まで御輿の渡御をしたものであったが、御旅所も焼き払われ、神領も取り上げられてしまいました。4年目に復興させようとしたときには、「所の百姓」が大勢出てきて「むかしの勝手はなりまじく」と暴力的に御輿を壊されました。神社も、力の喪失を自覚せざるを得なかったのではないでしょうか。

伊居太神社はその由緒を語る古文書を江戸時代の初めに失ったと記しています。中世的権威の喪失やその復興をめざす動きがどうなっていくのか、もっと詳しく知りたくなりました。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂（☎754・6674）